

多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム
派遣研究報告書

2012 年 10 月 31 日

派遣者氏名（専門分野）	大島 智靖 (インド学・仏教学)
-------------	---------------------

下記のとおり報告します。

記

研究テーマ	古代インドのブラーフマナ文献群に基づいたアグニシュトーマの再構築と思想史研究
-------	--

派遣期間

2012 年 8 月 1 日 ～ 2012 年 9 月 30 日

訪問研究機関	国	都市	訪問機関	受入研究者
	インド	Pune	Pune 大学	Shrikant Bahulkar 特任教授
	インド	Pune	Deccan College	Jayashree Sathe 教授

派遣先で実施した研究内容

①ブラーフマナにおける潔斎儀礼の思想解明とその行程の再構築、及び他の祭式との関係

報告者が大学院時代より一貫して取り組んでいるのは、古代インド・ヴェーダ祭式の儀軌を伝えるブラーフマナ文献の解読である。同文献はほぼ祭式の種類に従って編成されているが、ソーマ祭の基本形である Agniṣṭoma（或いは Jyotiṣṭoma）の儀礼解釈について記述した部分については、古層に位置すると考えられ祭式思想の発展を攻究する上で欠かせない Maitrāyaṇī Saṃhitā と Kāṭha-Saṃhitā の散文部分、即ち最も重要な文献を含む総合的な思想史研究が不完全である。しかしヴェーダの生まれた一そして現在も継続する一インドにおいて、ヴェーダ文献学者が従事するのは圧倒的に写本調査或いは現代も行われている祭式の調査が主である。ヴェーダ学研究的な写本事情は一部を除いて優良であり、また Pune において新写本の発見は望めないことから、報告者は、自身の研究課題について現地のヴェーダ学者と討論を重ねるということと、以下の②で述べるように現代のヴェーダ祭式調査に従事することとなった。Bahulkar 特任教授（Pune 大）の手引きにより、現在は引退しているが上記 Maitrāyaṇī Saṃhitā の研究に先鞭をつけた Dharmadhikari 博士を紹介してもらい、ブラーフマナ文献に限らず、Prayoga と呼ばれる祭式執行マニュアル補助文献を含めて、Agniṣṭoma についてお話を伺った。同博士はヴェーダ祭式全般に通じていると同時に、現在欧米・日本で行われているテキストの精読にも理解ある希少な学者の一人であるので、有益な場を設けていただいたと思う。また、Bahulkar 教授の弟子であるデッカン大学の Shilpa 博士を介して、ヴェーダ祭式及び密教儀礼などを専門とする Kolhatkar 博士と、ヴェーダ全般を専門とする Sahoo 教授に面会した。彼らが所属するデッカン大学の部署（Department of Sanskrit and Lexicography）は、サンスクリット辞典の編纂（Sanskrit Dictionary Project）を進めるセクションであり、膨大な語彙を、ヴェーダからサンスクリット文献全般の用例と共にカードに蓄積している。その作業を見学するとともに完成への遠い道のりを感じた。Pune 大学では、Bahulkar 教授が所属する部署（Department of Pali and Buddhist Studies）に案内していただき、パーリ文献学の Deokar 教授にも面会した。さらにサンスクリットの部署（Centre of Advanced Study in Sanskrit）において Ujjwala Jha 教授と面談した。滞在中は主に、Bahulkar 教授を介して紹介いただいたアパートメントを拠点とし、ブラーフマナ文

献の解説と再点検を進めた。報告者のテーマであるソーマ祭の導入儀礼である Dīkṣā（潔斎）の思想について、学派間の発展段階と解釈学の変容を検討した。

②ヴェーダ祭式における変化と継続 — 現代都市Puneにおけるヴェーダ祭式の伝統

デッカン大学の Sathe 教授はヴェーダを専門とするが、現在行われているヴェーダ祭式の情報についても詳しい。Sathe 教授の御教示により、報告者の滞在する場所からほど近い場所に Kulkarni 師という婆羅門が居り、ヴェーダ祭式の伝統を継いでいると知った。新満月祭 (Darśapūrṇamāsau) と呼ばれる、新月と満月の際に2日間に渡って執行される穀物献供祭は、日没時と日昇時に毎日行う牛乳の献供儀礼 (Agnihotra) と並んで、婆羅門が行う日常儀礼のひとつである。幸運にも滞在中に Sathe 教授の仲介により Kulkarni 師の快諾を得て、そのうちの新月祭を見学・調査する機会に恵まれた。9月16日の新月の日の朝10時、Pune の Warje にある Kulkarni 師の自宅を Sathe 教授と共に訪れた。可能であれば前日に行われる Upavasatha という儀礼も見学したかったが、それは叶わなかった。新月祭は屋上に設置された祭場で、4時間に渡って執行された。報告者はその模様を1500枚ほどの写真に収め、マントラの唱誦を録音した。Kulkarni 師は白 Yajurveda 系統の Vajasaneyin 派に属する婆羅門であり、当日の祭式では近隣のヴェーダ学インスティテュートから Hotar 祭官を招いていた。Adhvaryu 祭官は師の長男が務めた。他には Brahman 祭官と Agnīdhra 補助祭官が招集された。

研究の当初の目的・計画の達成状況、明らかにできた成果

①について。現在報告者が取り組んでいる Dīkṣā について、さらに考察を進めるとともに Bahulkar 教授の専門となる Atharvaveda 関連文献における Dīkṣā の様相を採り入れることが当初の目的であった。よって、Atharvaveda 研究の大家である Bahulkar 教授との交流は報告者にとって有益であった。しかし厳密には専門とする対象が異なるため、活かしきれなかった点が多々あり、今後の課題とせねばならない。Atharvaveda における Dīkṣā についての記述は断片的かつ特殊であり、報告者が文献上のフィールドとしている Yajurveda, Rigveda 及び Sāmaveda 系統のブラーフマナ文献の精査が第一であり現在の学界にとっても最優先すべきであることを確認した。また、現在のインドにおけるヴェーダ学の現状と可能性を知ることも大きな目的であった。Pune 在住または Pune に所縁多き日本人研究者は少なくないが、ヴェーダに関してはほぼ皆無であり、情報を得ることが困難であった。チベット仏教やタントリズム方面にまで研究が及ぶ Bahulkar 教授は頻繁に海外招聘や国際学会に与っておられるが、その他の学者や状況を知るためには現地に足を運ぶしかなかった。日本・欧米で開催される国際学会では出会う機会の少ないインドの学者に面会・議論できたことにより、研究の視野を広げることができた。同時に、インドにおけるヴェーダ学の現状も知ることができた。ヴェーダ文献は他のサンスクリット文献同様に教養のひとつとして包み込まれ、特にブラーフマナという難解な文献を、しかもその一部を専門に研究するというスタイルはほとんど見受けられない。日本・欧米でそのスタイルが継続しているのとは対照的である。報告者の視点は、Dīkṣā を巡る思想において「供物」と「胎児」という祭主が帯びる象徴的状态がどのような関係にあるかを総合的に解明する点にあるが、インドでそれを理解してもらうのは我が国ほど容易ではなく、プレゼンテーションの手法も再考する必要があると感じた。同時に、日本で継続しているブラーフマナ文献精読の研究方法は最もグローバルなものであり、今後も守っていかねばならないものであると確信した。②については、全く情報を得ていないこともあり当初全く渡印の目的には入っていないものであった。しかし Bahulkar 教授から Shilpa 博士を通じて、デッカン大学の Kolhatkar 博士と Sathe 教授とのコンタクトに成功したことにより、新たに調査対象となったものである。現代のヴェーダ祭式については、従来内外のヴェーダ学者によって調査されてきたが、その主なフィールドは伝統的かつ貴重なヴェーダ学派が残るインド南部のケーララ州やタミルナード州であった。Pune においては、過去に一度 Pavitreṣṭi と呼ばれるヴェーダ祭式が記録された。これは上記の新満月祭の簡易版であり、1979年に Bahulkar 教授が Nasik (Pune より北に 211km) より Pune に招聘した婆羅門に執行させたものである。その模様は Musashi Tachikawa, *An Ancient Indian Homa Ritual -Pavitreṣṭi, a Modified Form of Darśapūrṇamāsa-*, Part I, Plates, Studia Asiatica No. 8 (1985), 名古屋大学, 及び Tachikawa, S. Bahulkar,

M. Kolhatkar, *Indian Fire Ritual*, Delhi 2001 において収録された。貴重な記録であるが、これは一時的に行われたものであるという点、また祭式がPavitreṣṭiという現代簡易版であるという2点が問題である。ヴェーダの伝統を考慮するならばNasikに赴いて日常儀礼を調査するべきであった。そしてこれ以後の調査は無く、止まっているのが現状である。ヴェーダ祭式の現代的意義を明かす上で、こういった調査は文献精読と同時進行で為されるべきものであり、欠かせない。さらに上記の記録は民俗学・文化人類学的視点に重きが置かれており、ヴェーダ学からの観点が少ないためNasikの婆羅門家系の現状や元来の祭式モデルと比較したときの変容については多くの情報を得ることができない。そのような状況の中、Puneの一角でヴェーダ祭式の伝統を継いでいる白Yajurvedaの婆羅門、Kulkarni師の情報を得た。都市化が著しく、インド近代化の最前線にあるといえる都市にヴェーダの伝統があるということは、注目・調査に値する。それは即ちヴェーダ伝承の最前線でもある。今回の調査ではKulkarni師の師にあたる人物が近隣のヴェーダ学施設の創設者であることが判明した。より詳細なKulkarni師周辺の家系や経緯を調査することによって、現代においてどのような形でヴェーダが伝承が継続されているのか、多くの示唆を得ることになるだろう。プライヴェートの問題、またインドという国の気質の問題もあって、一度に深部の領域まで踏み込むことは難しい。今後、少しずつ攻めていく必要がある。祭式については、PrayogaとしてKāṭīyeṣṭidīpakaというテキストを用いていることが分かった。前掲書はBhandarkar Oriental Research Instituteに保管されているpavitreṣṭiのマニュアル写本の解読も行っているが、Kulkarni師を祭主として執行された新月祭はKāṭīyeṣṭidīpakaをPrayogaとしているので、一部異なるはずである。Nasikとの関係が如何であるのか、これも、Kāṭīyeṣṭidīpakaの解読と併せて調査する必要がある。また新満月祭同様に定例献供であるAgnihotraの現状も含めて現代の伝承を調査すべきである。これによってヴェーダ伝承の現在を世に伝えることができるであろう。

また、今冬にPuneより北に500kmのVarshiにおいてAśvamedhaを執行するロイヤル・ファミリーがいることが判明した。さらに来年春、Kulkarni師を祭主として、デッカン大学構内でAgniṣṭomaを執行する予定がある。こういった情報はSathe教授によって齎された。Agniṣṭomaは報告者の専門領域と重なるため調査に赴きたい所存である。同祭式には新満月祭の形式も含まれるため、今回の調査と連携する。ヴェーダ祭式執行情報のコネクションを確立したことにより、このような日本には届かないローカルな情報を得ることができたことは大きい。





派遣後の研究発表の予定

Dikṣā にまつわる思想については、『印度學佛教學研究』や『インド思想史学会』（京都大学）などの査読有論集に、発表の後に投稿する予定である。また現代のヴェーダ祭式調査については、上記の学会発表や学術誌投稿の他に、平成27年度にバンコクで開催される第16回国際サンスクリット学会のヴェーダ部会や、2013年以降のマハーラーシュトラ研究会などで発表する予定である。